

# 来南録

——土佐日記の先行文学として——

森 斌

はじめに

来南録は、中国に於ける紀行文の最初のもつとされてい  
る。作者は、中唐の文人李翱である。その来南録は、李文  
公集に収められているが、その全体が八百四十七字とい  
ふ小篇の紀行文で、いわゆる日次の日記と呼ばれる形態を取  
っている。

李翱は、元和三年（八〇八）に嶺南節度使であつた楊於陵  
の要請により、翌四年正月に赴任するために洛陽を出発  
し、約六ヶ月後に任地である広州に着いた。その赴任する

ための旅行が来南録の素材となつたのである。全行程七千  
六百里、道順は、洛陽——河陰——泗州——蘇州——杭州  
——富春——衢州——韶州——広州を經由している。任地  
広州に於ける李翱の官は、節度掌書記であるが、彼と同じ  
く韋詞が監察御史として、嶺南節度使に招かれている。李  
翱と韋詞とが前後しながら旅を続けている様子は、李文公  
集・卷十八に収められた「題桃榔亭」に録するところであ  
る。

本論は、中国で最初の紀行文と称される来南録と本邦で  
新しく日記文学を開拓した土佐日記とを比較検討する。そ  
れが、日記文学の発生という問題の追求になるであらう。

一、来南録と土佐日記

ところで、来南録が中国に於ける最初の紀行文なる旨は、前述した。この見解は、嘉永年間に伊勢山田の東夢亭が著わした鉏雨亭隨筆によるものである。その紀行文の条には、次の如く記されている。<sup>(1)</sup>

李翱来南録。蓋為<sub>二</sub>紀行権輿<sub>一</sub>。歐陽公于役志次<sub>レ</sub>之。  
叙事簡潔。可<sub>二</sub>以為<sub>レ</sub>法。

東夢亭は、来南録を紀行の「権輿」と述べているが、中国に於いては来南録より以前に法顯の仏国記、惠生の使西域記、鮑照の登大雷与岸妹書などが見られ、さらに馬弟伯の封禅儀記もその例として挙げねばならない紀行文である。然し、東夢亭のいう「可<sub>二</sub>以為<sub>レ</sub>法」とは、紀行文体の祖型となり得るという指摘であろうから、その指摘はほぼ認めねばならない。その点については、玉井幸助博士も概略同じ内容のことを述べられている。

大唐創業起居注に次いで李翱の来南録がある。之は唐の憲宗の元和四年に南支を旅行した紀行文で、正月から六月まで、連日の記ではないが、記すべき事あれば必ず日付(干支を以て記してある)をして記してある。一般には之を紀行文の嚆矢としてゐる。

玉井博士は、「之を紀行文の嚆矢」と述べられたが、来南録は中国に於ける紀行文体乃至は、紀行形態のはじめと認められている。その来南録と我が国の仮名文による最初の日記紀行形態の文学とされている土佐日記とを比較検討することは、古くは岸本由豆流に始まっている。由豆流は右のことに触れて次の如く記している。

いまこの土佐日記をはじめてつぎ／＼紀行といへるもの更科日記十六夜日記などそのほかいとおほかりこのすがたなるもの漢土にふるく見えたりそは唐の李翱が来南録をはじめとかせん貫之のぬしも来南録などを見てよりこの書をかゝれしかともおもはるれど猶おのづからにすがたの似たる也けりその外漢土にもいとおほかれどこゝにくらぶればみな紀氏より後のものなり

由豆流が土佐日記に関係づけて、ここで叙述しようとした主旨は、「猶おのづからにすがた似たる也けり」という箇所にあつたのであろう。この一文は、土佐・来南の両書が内容上に於いて共通するものがあるということではなく、たまたま両日記が形態的に類似することを認め得るという点にあつた。土佐日記の語句の典拠に詳しく触れた土佐日記考証で、来南録については土佐日記との関係に於いて具体的な類似点を何ら指摘する箇所がないことから、それは明白である。

ところが、「貫之のぬしも来南録など見てよりこの書をかゝれしかとも」と記されていることは、来南録と土佐日記との関係について具体的な類似点の指摘がない以上、由豆流の推量の域を出ないことになる。従つて、それは土佐日記に来南録が具体的な影響を与えているという点でなく、何らかの漠然たる関係がそこに立つのではあるまいかということになる。かかる指摘を最初にした人が、岸本由豆流であつた。

以後、土佐日記と来南録との比較検討による研究で、川口久雄博士の論には興味深い箇所が見出される。

土佐日記は中国の地理書の何らかの投影かもわからない。しかし歌をはさんでいるようなものはない。水経注にしる、西征記・北征記・来南録のごとき六朝や唐の游記にしる土佐日記と似ているとはいわれない。(略)直接には長谷雄や道真の競狩記や宮滝行幸記のごとき記録体真名文の紀行文学をうけたものと思われらる。紀家や菅家の散文文学様式をうけながら、さらに大きく展開して伝統的な雅の世界をつきぬけて、変革的な俗の世界を志向したものである。

右の文中、川口博士は、紀氏や菅家などの漢文日記で記された紀行文の伝統を貫之が直接受け継いだ、とされてゐる。その競狩記(花鳥余情では片野行幸記)や宮滝行幸記にしても、それらは貫之が恐らく既に知るところのものと考えられる。然るに、来南録は既読の文という確証が今日まで得られていない。また逆に、未知未見の文であると断定する根拠も見出し難いのが、来南録ということにもなる。

今、形態と漢詩の挿入という二点について述べるのであれば、競狩記・宮滝御幸記共に干支にはよらない日次の日記であり、その宮滝御幸記には漢詩が挿入されていて、共

に來南録よりも土佐日記に類似しているといえる。但し、右に指摘した二点が類似項として挙げ得ても、その内容を問うとき、兩日記は共に土佐日記と共通する本質的に貫いているものを持たない。そこに、川口博士が「中国の地理書の何らかの投影かも知からない」と述べざるを得ないものがあつた、と思われる。

この宮瀧御幸記が漢文によるものでありながら、漢詩が挿入されている形態は、日本漢詩文の特異性ともいうべきものであろう。中国に於いては、散文と韻文との混入による紀行文等は見出しにくい形式であつて、それは一種の和習でもあろうか。土佐日記より三百年後に出現した後世中国日記紀行文の代表といわれる「入蜀記」などは、その生涯に詠詩一万と称せられた宋の陸游によって書かれた作品でありながら、そこに一首の詩も挿入されていない。ところが、陸游は浙江省山陰から任地四川省におもむく六ヶ月にわたる旅中では、作詩をしているのである。従つて、川口博士がいう「歌をはさんでいるようなものはない」ということは、中国の詩が文章中に挿入を困難ならしめる要素を含みもつてゐるためではなからうか、と思惟するのである。

ともかく、土佐日記が中国の地理書の何らかの投影であ

るかといへば、今日著名な中国の文献では適當な作品は発見されていない。しかしながら、適當な作品が目前に見当たらないとの理由で、その可能性までを否定出来ないのが、土佐日記ということになる。それは、日記紀行という形態が我が国に於いて發生を見たものではなく、加えて土佐日記に漢籍趣味の充満している点があることによる。土佐日記は、中国文学との比較が可能な作品である。但し、直ちに來南録との比較を念頭に置くと、土佐日記は來南録そのものをその比較すべき対象たる出典とすることに、満足な期待ができないことも事實である。

即ち、土佐日記は今日の研究に於いて貫之が執筆した主旨に多様性を指摘され、そしてそれはそれなりに各論旨に肯定すべきものを含むからである。

然し、由豆流の説に従えば、來南録と土佐日記との比較検討を試みる必要性は、当然存するのである。

土佐日記の素材を端的に見るとき、その大半は貫之一行が帰京する舟旅に日々を過した経過を記したものであるから、いま舟旅を素材としている点に注目したい。舟旅を素材としてゐることに着目したとき、由豆流が述べた如く、中唐の文人李翱が記した來南録は、土佐日記の先行文学と

して認め得るか否かという検討を待つ作品となる。

## 二、日記紀行の形態

李翱は、元和三年十月に嶺南節度使から要請をうけ、同四年正月己丑（十二日）に洛陽の我が家を出て乗船、同乙未（十八日）にその洛陽を出発している。それは来南録の冒頭に記されている。

元和三年十月。翱既受嶺南尚書公之命。四年正月己丑。自旌善第一。以妻子。上三船於漕。乙未。去東都。

洛陽の旌善坊の我が家から妻子と乗船、都を離れたのであるが、ここで注意をひく一節がある。「翱既受嶺南尚書公之命」とある傍線部Aで、如上の一節は、今次の旅が嶺南節度使の命令による赴任であったことを記述している。彼はまず旅の目的を巻頭で示した。冒頭で旅行の目的を鮮明にして簡潔な筆で記すことは、土佐日記も同様である。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてすなるなり。その年の十二月の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかにもに書きつく。

ある人、<sup>A</sup> 県の四年五年はてて、例のことどもみなしをへて、解由などとりて、<sup>B</sup> 住む館よりいでて、<sup>C</sup> 舟にのるべきところへわたる。かれこれ、知る知らぬ送りす。

引用した「県の四年五年」とあるように、貫之は国司の任期満了に伴う帰京の旅であった。しかも兩日記の本文を引用した傍線部A、B、Cは、それぞれその内容に類似するものがある。即ち、Aの部分は、今次の旅の目的を、Bではこれ迄生活していた館を、そしてCの箇所は舟が出帆する場所についてを、各々記している。来南録に記述するところなく土佐日記に録されているものは、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」という女性仮託の一文である。この一文は、古来から論議を呼んでいるところであるが、仮名書き文という問題を一応除外して、日記をものするという自主的な意図をこの一文から汲みとりたい。そうした意図の明記は、来南録では引用すべ

き箇所が見当たらないのみならず、その全文の何れの箇所からも指摘できないのである。

かかる日記を執筆する動機を明記してあるや否やの問題を離れたとき、両書の書き出し部分は、内容がほぼ類似していた。即ち、兩日記は、傍線部A、B、Cの内容に近似するものがあつた。

さて、中国に於ける代表的な紀行文に於けるその書き出し部分は、一体如何ように記されているのであるうか。先ず、来南録を溯る古い文としては仏国記を、後世の紀行文として入蜀記を、それぞれ引用してみる。

仏国記では、

法顯昔在長安。慨律藏殘缺。於是遂以弘始二年  
歲在己亥。与慧景・道整・慧応・慧鬼等同契。至  
天竺。尋求戒律。初発跡長安。

とあるし、入蜀記では、

乾道五年十二月六日。得報差。通判夔州。方久  
病。未堪遠役。謀以夏初離郷里。六年閏五月十

八日。晩行。夜至法雲寺。兄弟餞別。五鼓始決去。

と書き始められている。

仏国記では、旅の目的が「尋求戒律」ということであり、入蜀記が「通判夔州」たるための赴任に関するものであつた。この両書ともに、冒頭で旅行が如何なる目的のもとに行なわれるか、理由が明記されている。

土佐日記よりも古い我が国の日記紀行文、長谷雄・道真が記した片野御幸記・宮滝御幸記には、

十月廿日。主上聊弄小鶴。逍遙歴覽。

十月廿一日。太上天皇有御鷹狩逍遙。

などと、その出遊する目的が記述されている。

然るに、入唐求法巡礼記や行歴抄などには、その渡唐の目的を冒頭で記していない。この冒頭に旅の目的を記すということに、官人意識の働きがあるか否かは、不明であると言わねばならないのであるが、しかし土佐日記には任はてて帰京する旅なる趣のことを記していることは、その原形が具注歴によるものであるう、ということを推量する

目安にもなる。

来南録は、その旅の目的を記述したあとに続いて、

韓退之・石濬川飯<sub>レ</sub>舟送<sub>レ</sub>予。明日及<sub>三</sub>故洛東。吊<sub>三</sub>孟

東野。遂以<sub>三</sub>東野<sub>二</sub>行。濬川以<sub>三</sub>妻疾<sub>一</sub>。自<sub>三</sub>漕口<sub>一</sub>先婦。

黄昏到<sub>三</sub>景雲山居<sub>一</sub>。詰朝登<sub>三</sub>上方<sub>一</sub>。南望<sub>三</sub>嵩山<sub>一</sub>。題<sub>三</sub>姓名<sub>一</sub>記別。既食。韓・孟別<sub>レ</sub>予西歸。

と記されている。

広州に旅立つ一行を見送りに来た人名が記されている。

「南望嵩山。題<sub>三</sub>姓名<sub>二</sub>記別」とあるように、姓名を録して惜別の詩が詠まれたのである。事実、このとき詠まれた惜別の詩が、孟東野集・卷八に「送<sub>三</sub>季習<sub>二</sub>之」として、また韓昌黎集・卷四には「送<sub>三</sub>季翱<sub>二</sub>」として、それぞれ収められている。来南録に於いては、出発に際して惜別の宴などが催されているが、同様に土佐日記でも「馬のはなむけ」が行なわれていて、就中十二月二十六日の条に於いては、

なほ寺の館にて、あるじののしりて、郎等までにものかたづけたり。唐詩、声あげていひけり。和歌、

あるじもまらうども、こと人もいひあへりけり。唐詩はこれにえ書かず。和歌、あるじの守のよめりける

都いでて君に逢はんと来しものを来しかひもなく別

れぬるかな

となんありければ、かへる前の守のよめりける

白樗の波路を遠くゆきかひてわれに似べきはたれならなくに

などと、貫之と島田公鑿とが惜別歌を詠み交わしている。

土佐日記の作者が女性を装っているためであろうか、漢詩が朗吟されているのであろうが、その漢詩は書き留められていない。また、見送りに来た人々の名前が、土佐日記の十二月二十二日、同二十三日、同二十七日などの条に記されていて、来南録と類似している。

このように来南録と土佐日記との両著を披見するとき、その冒頭に旅行の目的を記し、旅立ちの宴を続いて描いて、さらに宴に居る人名を記していることなどの三点が、共通していた内容であった。このことは、日記形式による紀行文であるところに、両日記が共通した内容をもたらしたのであろう。そして、両日記は、目的地へと旅が進めら

れているが、日々その旅に纏る描写が日次記の形式でそれぞれ記されている。しかも、旅日記であるために、兩日記は目的地に着いたとき筆を投ずることになる。来南録は広州、土佐日記が京にそれぞれ到達したときに筆を擱いた。ただし、来南録は巻末にその旅行の行程が詳細に記されている。即ち、「癸未。至三広州二につづいて、

自三東京二至三広州一。水道出三衢信一七千六百里。出三上元西江一。七千一百有三十里。自三洛川一<sub>下</sub>三黄河汴梁一過<sub>レ</sub>淮至三淮陰一。一千八百有三十里。順<sub>レ</sub>流。自三淮陰二至三邵伯一。三百有五十里。逆<sub>レ</sub>流自三邵伯一<sub>至</sub>三江。九十里。自三潤州一<sub>至</sub>三杭州一。八百里。渠有<sub>三</sub>高下<sub>一</sub>。水皆不<sub>レ</sub>流。自三杭州一<sub>至</sub>三常山一。六百九十有五里。逆<sub>レ</sub>流多<sub>三</sub>驚灘<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>竹索<sub>一</sub>引<sub>レ</sub>船。乃可<sub>レ</sub>上。自三玉山一<sub>至</sub>三湖七百有<sub>三</sub>一十<sub>一</sub>里。順<sub>レ</sub>流。謂<sub>三</sub>之高溪<sub>一</sub>。自<sub>三</sub>湖<sub>一</sub>至<sub>三</sub>洪州<sub>一</sub>。一百一十八里。逆<sub>レ</sub>流。自<sub>三</sub>洪州<sub>一</sub>至<sub>三</sub>大庾嶺<sub>一</sub>。一千有八百里。逆<sub>レ</sub>流。謂<sub>三</sub>之漳江<sub>一</sub>。自<sub>三</sub>大庾嶺<sub>一</sub>至<sub>三</sub>潁昌<sub>一</sub>。一百有一十里。陸道。謂<sub>三</sub>之大庾嶺<sub>一</sub>。自<sub>三</sub>潁昌<sub>一</sub>至<sub>三</sub>広州<sub>一</sub>。九百有四十里。順<sub>レ</sub>流。謂<sub>三</sub>之潁江<sub>一</sub>。出<sub>三</sub>韶州<sub>一</sub>。謂<sub>三</sub>之韶江<sub>一</sub>。

と付記されている。

この付記された文によって、洛陽から広州へ行く道が二途あって、李翱はわざわざ迂回路を通っている。それは、彼が衢州、信州を経て広州へ着いていることに因る。この当時、都から南へ向う道は、商州を経て洞庭、湘水、衡陽を通過する路、または鄱陽湖から贛水を遡って大庾嶺を越える路などである。<sup>(5)</sup>

李翱は、汴州、揚州を経て常山、擔石湖などを通過する道を選んでゐる。その道を選んでゐることは、旅が赴任のためというより、旅中で名所旧跡を見物する意図をもっていたのではないか。そこに広州へ通じる道を選択せしめたところがあつた、とも考えられる。彼が長路を選定した問題は、地理学的に、また其の他考えなければならぬが、紀行文として補うに足る要素があるので後述する。

来南録に対する一方の土佐日記は、海洋の模様、対岸の風景、天候の変異など折々の旅路に於ける様が、巧妙に描かれてゐる。しかし、旅の行程を記述した箇所如きは見られない。勿論、紀行という言葉は、「旅の行程を記す」というのが原義であるから、来南録が土佐日記よりも原義に忠実であるといえる。一体来南録のように巻末にその行



程を記載するという紀行日記は、未見のものに属するが、土佐日記も紀行日記という形式を取る点から、その地名上の記述は、基本的に事実を記している。

以上は、来南録と土佐日記との冒頭部分、巻末部分とに分離し、一応の比較と検討とを加えて見た。そのことから導き出された事項は、巻頭に於いては旅行の目的とそれに伴う惜別の宴とその内容がほぼ一致する内容を認めたことである。また、巻末の記載に於いては、兩日記が異なるところで、来南録は巻末に一括して行程の記録を総括して載せている点にある。土佐日記は、極めて叙情的な終末である。即ち、土佐日記の最終日たる二月十六日の条は、亡児を悼む二首の哀傷歌を録している。

生まれしもかへらぬものをわが宿に小松のあるを見る  
が悲しき

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせまし  
や

右の二首は、我が家に新しく芽生えた小松の成育している様を貫之が発見し、子供の死と小松という新しい生命と

を対照させた歌と、万年永求の寿命を期待する樹木の代表たる松に生命力を暗示させ、その常緑から生命の尽きない子供であれ、と願う親の心情を秘めさせた歌である。そして、この二首は、「小松」と「松」とが「かへらぬ」という現実にも引きもどして、「見るが悲しき」「遠く悲しき別れ」という亡児を追懐させている。

それは、松という樹によって現在から過去へ、現在から未来へという時制の転化を呼び起こさせるのである。その現在という現実を認めたとき、引用した二首の歌は、共通した亡児を追懐する悲しみという主題を詠んだ連作二首であることが理解されることになる。亡児への悲傷を吐露した和歌を挿入させて、貫之は土佐日記の筆を擱いた。

但し、その日々の出来事を連続しながら記している件は、その記述の量や質を問わない限りに於いて、ほぼ日記形式という点で一致している。とにかく、兩日記は、土佐日記の先行文学として見る来南録も土佐日記自体も目次の日記という形態を取る紀行書であった。

### 三、類似の比較

兩日記の類似した素材に注目するとき、三項の類似した内容が採り上げられるであろう。まず第一に採り上げたい問題は、兩日記が船旅を素材として記述していることである。すなわち、来南録は海路ではないが、「南船北馬」と俗にいう南船に当る河渠を利用した旅路を主体としている。

その河渠を利用した船旅が描かれた箇所を採り上げると、次の如くである。

A、己丑。自<sup>三</sup>旌善第<sup>一</sup>。以<sup>三</sup>妻子<sup>一</sup>。上<sup>三</sup>船於漕<sup>一</sup>。  
B、庚子。出<sup>レ</sup>洛下<sup>レ</sup>河。止<sup>三</sup>汴梁口<sup>一</sup>。遂<sup>レ</sup>泛<sup>三</sup>汴流<sup>一</sup>。通<sup>三</sup>河于淮<sup>一</sup>。

C、丙辰。次<sup>三</sup>泗州<sup>一</sup>。見<sup>三</sup>刺史<sup>一</sup>假<sup>レ</sup>舟<sup>レ</sup>轉<sup>レ</sup>淮上<sup>レ</sup>河。如<sup>三</sup>揚州<sup>一</sup>。

D、丁亥。官艘隙。水溺舟敗。

E、庚申。下<sup>三</sup>汴渠<sup>一</sup>入<sup>レ</sup>淮。風<sup>レ</sup>帆及<sup>三</sup>肝胎<sup>一</sup>。風逆天黒色。波水激順<sup>レ</sup>潮入<sup>三</sup>新浦<sup>一</sup>。

右に引用した以外にも、河渠を利用した舟旅に触れた箇所はある。この引用の例B、C、Dで知られるように、記述は備忘録の如く簡潔ではあるが、要を得ている。また、Eの例で知られるように、淮水といえども一度風が吹き荒天となれば、河は波立ち逆巻く有様である。それは想像を絶する苦しみのときでもあろう。

土佐日記にも、その淀川を遡行する苦勞が記されている。

A、七日、今日、川尻に舟いらちて、漕ぎのぼるに、川の水干て、悩みわづらふ。舟の上ることいかたし。  
B、八日、なほ河上りなづみて、鳥飼の御牧といふほとりに泊る。

土佐日記は、その主要部分が天津から川尻までの海路に素材を得ている。従って、来南録の河渠を主とした舟旅とは、その質を異にするものであって、その記述された内容は若干の相違を認めなければならない。

来南録が月日、山川、径路の大略について記述したとす

れば、土佐日記は船中の人物を描写したり、こまかな観察のもとに更に人物の批評を加えたり、さらに作歌上の評論にも及んでゐる。悪天候による風待ちの苦しみ、海賊に対する恐怖など、それらは来南録に於いて見られない記事であり、土佐日記が詳しく描写していることも相違している。また、来南録が南行する赴任の旅であり、土佐日記は北行する帰任の旅である。だが、土佐日記の叙情豊かな文章に対し、来南録の簡明な文章は、比較する対象を離れて味がある。

次いで類似する船旅として採り上げたいことは、来南録に竹索をもって船を引く部分があることである。

自<sub>二</sub>杭州<sub>一</sub>至<sub>二</sub>常山<sub>一</sub>。六百九十有五里。逆<sub>レ</sub>流多<sub>三</sub>驚灘<sub>一</sub>。  
以<sub>二</sub>竹索<sub>一</sub>引<sub>レ</sub>船。乃可<sub>レ</sub>上。

土佐日記に於いても「かく船曳き遡るに、渚の院といふ所を見つつ行く」と、二月九日の条に見えるのは、船を綱で引きつつ遡っていったのである。来南録が竹索をもって上流へ遡行することと同じ描写である。両日記共に曳船の辛苦の中に目的地へ向う状態が見られる。

類似項の第二としては、土佐日記と来南録とが家族を伴った旅に素材を得ていることである。従って、そこに伴なわれた家族は、当然日記に記載されてくる。注目に価することは、来南録が旅中に女子の出生を記していることである。

辛丑。至<sub>二</sub>衢州<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>妻疾<sub>一</sub>止<sub>レ</sub>行。居<sub>二</sub>開元仏寺臨江亭後<sub>一</sub>。三月丁未朔。翺在<sub>二</sub>衢州<sub>一</sub>。甲子。女某生。

引用した「妻疾」とは、出産のことであるが、それは衢州の地に四十日余りの間逗留させることになった。李文公集・卷十八に収められた「題枕榔亭」で、李翺は「翺以<sub>二</sub>妻疾<sub>一</sub>居<sub>二</sub>信安<sub>一</sub>四十余日」と記している。一方、土佐日記には、任国で亡くした女の子に対する追想が終始に記されている。

一月十一日の条を例に採り上げれば、

この羽根といふところ問ふ童のついでにぞ、また昔へ人をおもひ出でて、いづれの時にか忘る。今日はまして母の悲しがらるることは。下りし時の人の数た

らねば

と記されていて、亡児とその母とが登場している。

更に今一つは、李翺も貫之も旅中で病を得ていることにある。

来南録には、

乙巳。次<sub>三</sub>汴州。疾又加。召<sub>レ</sub>医察<sub>レ</sub>脉。使<sub>三</sub>人入<sub>レ</sub>廬。

とあり、他所にも「戊戌。予病<sub>レ</sub>寒。飲<sub>三</sub>葱酒<sub>一</sub>以解<sub>レ</sub>表」などとも記載されている。

土佐日記には、貫之も二月七日に「舟君の病者」と記して、

来と来ては河上り路の水を浅み舟もわが身もなづむ今

日かな

とくとおもふ舟悩ますはわがために水の心の浅きなり

けり

と、自己の心情を詠んでいる。

病を得たときは、碇泊しなければならなくなるのであるうし、それが家族などについても記す結果となるのであるうか。来南録には、妻の出産が記されていた。土佐日記には、子を失った舟君やその妻のことが記されている。それは家族を伴う舟旅であったことが演出させたともいえる。

類似の第三は、旅情に類似したところが認められることである。兩日記は、旅行期間も異なる上に、国情も氣候風土も相違している。加えて旅の目的が異なっている。来南録が赴任の、土佐日記が帰任の旅を、それぞれの日記は素材としている。然し、その東洋的な旅情には、おのずから似通うものがある。

来南録の冒頭部は、前に引用したとおりであるが、李翺が出発するにあたって韓愈・石濬川は小舟を借りて彼を送っている。その翌日には、彼等は孟郊を訪れ、彼も加わって景雲の山荘に行っている。そして、李翺は韓・孟と惜別の詩を詠み、飲食を共にしている。

土佐日記の文頭部に於いても、旅の目的を記し、その後の数日は馬のはなむけが行われたことを記している。その有様は、兩日記ともに大要が同様の文意をもっている。

また、旅路で地方人が接待してくれた様子、知人の来訪

などの記事などに量の相違はあっても、両書に採用された素材である。

四月丙子朔。翱在<sub>二</sub>衢州。与<sub>三</sub>侯高<sub>一</sub>宿<sub>二</sub>石橋<sub>一</sub>。

と記されている侯高とは、李文公集・卷十四に「故処士侯君墓誌」があり、又同集・卷十七に「答侯高第二書」がある知己である。その侯高が李翱を訪れている箇所を引用してみた。その他、李翱の赴任を要請した嶺南節度使楊於陸には、洪州で出会した。そのことを、

辛丑。至<sub>二</sub>洪州。遇<sub>二</sub>嶺南使。游<sub>二</sub>徐孺亭<sub>一</sub>。看<sub>二</sub>荷葉<sub>一</sub>。

と、李翱は明記している。

かくの如く来南録と土佐日記とを対比するとき、旅情の記述に類似点を認められるが、次の段階では両日記を更に紀行文学として比較検討してみたい。来南録は、備忘を主とした記述をする態度で筆を進めた短文に属しながら、名所旧跡と称せられる所に意外に詳しい描写をついやしている。そこで、船旅を主体とする立場から問題を採り上げ

て、類似内容が紀行文学として、両日記はふさわしいものであるかを考察する。

#### 四、紀行文学として

中国の日記紀行文学で最も土佐日記に近似した作品を採り上げるとすれば、陸游の入蜀記を先ず挙げたい。その入蜀記は、風波の危険や盜賊の恐怖、旧跡に於ける古詩への回想、知人などの接待と歓迎、その置酒の趣向など、土佐日記と共通する内容を各所に含んでいる。そして、入蜀記の形態も来南録に始まっていると思惟される。その日記紀行の始祖と称する来南録は、叙述すべきことに興味を催す箇所に至ると、簡潔にしかも平易さを失わずに巧みに表現している。それは、古文体を唱えたであろう李翱の文として、来南録の文体の特徴でもある。

例えば、「辛未。濟<sub>二</sub>大江。至<sub>二</sub>潤州<sub>一</sub>。戊辰。至<sub>二</sub>常州<sub>一</sub>。壬午。至<sub>二</sub>蘇州<sub>一</sub>。」と記した後、

癸未。如<sub>二</sub>虎丘之山<sub>一</sub>。息<sub>二</sub>足千人石<sub>一</sub>。窺<sub>二</sub>劍池<sub>一</sub>。宿<sub>二</sub>望梅樓<sub>一</sub>。觀<sub>二</sub>走砌石<sub>一</sub>。將<sub>レ</sub>游<sub>二</sub>報恩<sub>一</sub>。水潤舟不<sub>レ</sub>通。無<sub>二</sub>馬

道。不<sub>レ</sub>果<sub>レ</sub>遊。

とあり、行文に文飾なく簡明に虎丘が描写されている。

李翱がかく記述に対する興味を示した所以は、その虎丘にある。虎丘之山は、蘇州の名勝である。芸文類聚などにも取られた名所、日本流で歌枕であろうか。

近代日本人にも興味をもたらしたらしく、大正十年にこの虎丘を芥川龍之介が訪れている。

虎丘も荒廢を極めてゐた<sub>レ</sub>つ。あすこは呉王闔閭の墓ださうだが、今日では全然塵塚の山だね。伝説によればあの山の下には、金銀珠玉を細工をした鴨が、三千の宝劍と一しよに埋めてあると云ふ。そんな事だけ聞いてゐる方が、反つて興味が多い位だ。(略)殊に劍池などと来た日には、池と云ふよりも水たまりだね。しかも五味捨て場も同じ始末なのだから。(支那游記・江南游記・一九)

ちなみに李文公集・卷十八に収める「題峽山寺」の中で、「未<sub>レ</sub>言<sub>三</sub>其所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>足。如<sub>三</sub>虎丘之劍池不<sub>レ</sub>流」と、虎丘

の劍池の流れざることを嘆いている。元和四年には、既に芥川がいう「池と云ふより水たまり」の状態にあったのであろうか。

さらに「游<sub>三</sub>報恩」とあるが、彼の師事した韓愈は古代主義者であつた。従つて、社会を破壊する思想なりとして、仏教と道教とを痛烈に攻撃した。それは韓愈の「原道」にあらわれ、時の天子憲宗に「仏骨を論する表」の奏上となり、潮州刺史へと左遷される運命となつた。<sup>(6)</sup>しかし、李翱は韓愈と一面異なる思想をもつていたのであろう。報恩寺へ出かけようとしたのである。しかも、報恩寺へ行く道は、水が涸れて船も通わず、また馬道とてなく遊べなかつたと、特記するのである。即ち、狩野博士が「禪字に於ても造詣深かつた」と述べられる李翱の性格をここに見るのである。

とにかく韓愈との思想的な相違は別問題として、今次の旅が単なる赴任する目的だけではなく、名所・旧跡に遊ばんとした姿を文中に認めたい。

そのことは、蘇州の名所虎丘山のみならず、杭州の名勝西湖に於いても指摘できる。杭州に到つた後のことを、

戊子。至杭州。己丑。如武林之山<sup>即靈隱寺</sup>。臨<sup>三</sup>曲波<sup>一</sup>。觀<sup>三</sup>輪囷<sup>一</sup>。登<sup>三</sup>石橋<sup>一</sup>。宿<sup>三</sup>高亭<sup>一</sup>。晨望<sup>三</sup>平湖<sup>一</sup>。孤山江濤。窮<sup>三</sup>竹道<sup>一</sup>。上<sup>三</sup>新堂<sup>一</sup>。周眺<sup>三</sup>群峯<sup>一</sup>。聽<sup>三</sup>松風<sup>一</sup>。召<sup>三</sup>靈山<sup>一</sup>。永吟<sup>三</sup>猗猗<sup>一</sup>。猿山童子<sup>三</sup>反舌<sup>一</sup>。

と、彼は叙べている。

杭州に到着した翌日、李翺は武林の山を登り、その翌朝に平湖を眺望している。平湖とは杭州の名勝であり、別名を西湖、いわずと知れた古詩に多く登場する湖である。その西湖のそばに靈隱天竺寺があり、芥川は虎丘と同様に訪れている。その支那游記（「江南游記」・十二）に、彼は靈隱寺の印象も記している。

李翺も「題峽山寺」では、劍池と同様に諸山居の足らざる所として、「天竺之石橋下無<sup>三</sup>泉<sup>一</sup>」と述べている。彼が期待していた名勝にやや失望していたことがその文から知られる。しかし、虎丘山、西湖などについては、他に比して詳細にわたって来南録が記述していることに変わりはない。やはり李翺が興味を引いた所以であろう。彼の立場は、自然そのものの美しさに心が引かれるというものでなく、名勝や旧跡の地なるが故にその風景を叙す、という

ことである。

その地が名所であり旧跡であるがために、自然描写が挿入されるといふことは、土佐日記に於いても同様な形式を踏む。貫之は、雄大な風光をもつてなるかの室戸崎、鳴門海峡、さらに淡路島などの風景を記してはいない。同じく、砂浜に続く碧海、目のさめる程鮮かな色彩の和泉の浜辺には、彼が興味の片鱗すらも示さなかった。自然そのものの美は、紀行の興味から除外されていた対象である。貫之が最も興味深く記述した風景は、二月九日の条に登場する「渚の院」である。この地は、有名な歌枕であった。歌枕であるが故に、彼は興味を示すのである。

来南録も土佐日記も共に紀行文学と呼ばれている。事実、両日記は旅を最も重要な素材として書かれた文学である。にもかかわらず、一度接するとき脳裏を離れざる自然の美は、両作家にとって記録にとどめる程の興趣を起し得なかつた。この種の自然美は、両日記が成立した時代には紀行文学の対象になつていなかった。それは詩歌の世界であつたのかも知れない。然るに、史蹟や歌枕は、描写されている。已に古歌に詠まれ、或は史実の美化された場所については、彼等は等閑に出来なかつたのである。

人が「吉野山はいづれの国ぞ」と尋ね侍らば、「只花にはよしの山、もみぢには立田を読むことゝ思ひ付きて、読み侍る計りにて、伊勢の国やらん、日向の国やら「ん」しらず」とこたへ侍るべき也。いづれの国と云ふ才覚は覚えて用なき也。

と、正徹物語にある如く、歌枕は歌枕なりに興味を引いたのである。

もちろん、貫之や李翺が「伊勢の国やらん、日向の国やらんしらず」「不知<sup>三</sup>揚州・蘇州」などという筈もない。彼等は、行程に関することに細心であつたのだから。

来南録と土佐日記とは、自己の旅を通して自然美を体験し、それを叙述する対象とした種類の紀行文学ではなかつた。両紀行日記は、その自然美ということを示した興味も名所旧跡という伝統の背景に支えられたものであつた。それ故、行きずりの風景などは、記すべくもなかつたのである。現在でいう「旅行」「紀行」などが意味する自然に対する感覚とは、凡そ異質な旅に対する彼等の興味であつた。もちろん、現代人も京都、奈良は、旅する思慕をつのらせる場所である。しかし、古都だけが、自然の景物を描

く対象ではない。紀行文に於ける自然描写は、今日多岐にわたっている。

振り返つて見るに、中唐の文人李翺が示した自然に対する興味とその描写とは、土佐日記と全く同質の立場にたつものであつた。従つて、紀行文学として両日記は、同種の特徴をもつていたことになる。

## 結 び

土佐日記を端的に紀行日記文であると規定して、来南録が如何なる点に於いて土佐日記と内容が類似するかを考察してみた。その結果、来南録は、日記紀行文という形態、家族を伴つた船旅という素材、旅情の描写、さらに紀行で見た名所旧蹟に対する興味ということが、土佐日記と極めて類似する諸点であつた。その意味に関する限り、来南録は土佐日記の先行文学たる一つといわざるを得ない。ところで、由豆流が貫之の土佐日記に於ける創作態度に対して、「来南録などを見てより」と述べたことは、その典拠の発見が困難であり、推定の域を出ないものではないかと思われる。さすれば来南録が土佐日記に直接働きかけ



るところは少く、先行文学として呼称される因を薄弱にする。加えて既述したごとく、土佐日記は、紀行日記という形態を借りた文学ではあるが、更にいくつかの主題設定のあることが指摘されている作品でもある。歌論、俳諧味、自己返照、作歌手引書等の主題、構成面から戯曲的な構成、虚構成、諷刺性等、以上種々な主題と作品構成に多目的な意図のあることが論議されている。それに対する来南録には、多目的な主題はない。紀行日記たる本質で貫いている。

憲宗の元和四年（八〇九）六月、李翺は広州の地に着任した。その時から貫之が土佐から帰京した承平五年（九三五）二月十六日までは、約百三十年を経過している。その間、我が国に於いても、円仁の入唐求法巡礼行記の如き日次記による紀行文が生まれていた。また、片野御幸記、宮滝御幸記の如く、主上の御狩逍遙の扈從旅行記が出現されている。殊に、入唐求法巡礼行記の世界は、その辛苦、悲喜の世界を表面に一言も訴えることなく、常に冷静な態度を崩さず表現していて、十年の求法巡礼の旅日記と五十余日の自己観照の色彩が濃厚な紀行文とは比較すべくもないのであるが、紀行文として巡礼行記は土佐日記に先駆するもの

があった。地の文中に和歌を交じえて、文主歌従の新しい形態を創安した貫之が紀行文の構想に見せた技巧も、先行するかすかながらの影はあった。宮滝御幸記（昌泰元年）の十月二十五日、二十八日などに道真は、地の文中に漢詩を挿入していることが注目されてよい。

さて、来南録に戻って眺めるとき、貫之がこの中唐の紀行文にはたして目を触れることが出来たかということについて、確証は得られない。その有無はあくまで、今日、推測の域を出ないものである。紀行日記という形態と素材の内容から考慮して、土佐日記が成立する迄に存在していた紀行文として、来南録がもっとも類似する傾向にあることだけは確実な作品である。従って、紀行日記という形態を取る近似文学として見る場合にのみ土佐日記に先行する文学として、来南録はその存在価値をもつといえる。

ただし、土佐日記は女性に仮託する立場で、漢詩文と同等の価値を確保しようとし、仮名書きの紀行文たる典拠にするべく、更に新奇な構想に基づいて様々な主題を設定し、自己返照の文学という新しい文学を開拓しているという点で、爾後の我が国に於ける日記紀行文学の先蹤であり祖形ともなっている。その意味することは、それらの点に

も充分考慮しないと先行文学論が容易に成立しないということである。

〔注〕

- (1) 『日本詩話叢書』(五)、三二〇頁。
- (2) 『日記文学概説』、七〇頁。
- (3) 『国文注釈全書』(九)、一九五〜一九六頁。
- (4) 『平安朝日本漢文学史の研究』(上)、二二五〜二二六頁。
- (5) 『新釈漢文大系』の『唐詩選』、一八頁の解説参照。
- (6) 『中国詩人選集』の『韓愈』、七頁参照。  
『漢詩大系』の『韓愈』、三五〜三八頁参照。
- (7) 『中国哲学史』、三四七頁。